制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

曼荼羅をまとい宇宙になる

大内典
宮城学院女子大学教授

社会における役割を明示してくれる衣装ならめずらしくない。しかし身にまとうことで、ある宇宙観、いや宇宙そのものが心身と内奥からひとつになる衣装なんて、他にあるだろうか。

「なりきり」力

「総新客衆！」「うけたもうー」

毎年夏の終わり、羽黒山中に大時代的な声が響く。江戸時代から連綿と続けられてきた羽黒修験「秋の峰」である。呼びかけるのは儀礼を率いる先達のひとり導師。応えるのは総勢八〇名から百名にもなる峰入りの行者。行者たちのほとんどは、夏の峰入りのときだけ山伏名を名乗るいわば「パートタイム」山伏だ。普段は普通の職業人として、あるいは学生として、山伏とは無縁の生活を送る。その彼らがひとたび「秋の峰」に入ると、地位も年齢も性別も白紙に戻り、ひとりの山伏になりきって行に向き合う。そこでの筆者は羽黒修験「妙音院」。現実の自分を葬り胎児となって母胎である山に籠る。そこで地獄から仏に至る心の成長過程を経験しながら、自分が大日如来＝宇宙とひとつである理に触れ、あらたな存在としてこの世に戻るのである。その過程をいかに「なりきって」過ごすことができるかが、儀礼のリアリティを左右する。山伏名で呼ばれる。断食や睡眠不足で生命力をゼロに近いところまで落とす。とうがらし入りの煙でいぶされる「南蛮いぶし」で地獄を体感する。いずれも「なりきり」力を支える。山伏装束もまた、大きな役割を担っている。

シンボルのかたまり

山に伏せるから「山伏」。山で「験」を「修」めるから「修験」。山中での修行（峰入り）が整備されたのは中世とされる。西の熊野修験に対して東日本を制したのが出羽三山を本拠とする羽黒修験だった。峰入りの山伏は、独特な装束をつける。鈴懸衣の名で知られる上衣、頭につけるお椀型の頭巾、ぼんぼりのような飾りがついた結袈裟、貝の緒といわれる朱色の腰紐、鹿皮の腰当て引敷、そして法螺貝等々。それぞれ実用的な用途とともに象徴的な意味をもつ。たとえば頭巾は山道で額を護り、水場では器にもなる。貝の緒は、ザイルの役割を果たす（じつは筆者、峰入り初参加のとき、急な山道ですってんころりん、足を痛めて動けなくなった。そのとき、先達のひとりがやおら貝の緒を解き、背中にわたしをくくりつけて軽々と山を降りてくれた！）。一方で、頭巾は「大日如来の五智の宝冠」、貝の緒は行者と母胎を結ぶ「へその緒」と、意味付けられている。羽黒修験の上衣は、市松文様に獅子が描かれた独特な意匠で、「摺衣」といわれる。獅子は仏の教え、市松文様はその教えが盤石であることを示す。そして、装束全体は不動明王を象るものであるとともに、上衣は宇宙の生成力をあらわす胎蔵界、袴は宇宙の理をあらわす金剛界とされる。つまり、この装束で、全身に仏教の宇宙観を象徴する胎蔵・金剛の曼荼羅をまとうことになる。

究極のコスプレといったら罰が当たるだろうが、この装束がもたらす「なりきり力」は事実、大きい。装束をつけた途端、みな「山伏」の顔になる。そうして味わう「再生」の実感があるからこそ、明治の廃仏毀釈も第二次世界大戦後の社会の激変も越えて、「秋の峰」は生き続けてきたのだ。

つつまれ、解き放たれる

羽黒修験の峰入りでは、音が重要な役割を担う。それを追いたいがために峰入りをはじめて早や幾年月。儀礼的な音と衣装という文化装置には大きな共通点がある。音も衣装もわれわれをつつみ込み、心身を変容させる。峰入りの回数を重ねた装束には、抹香の香り、「南蛮いぶし」の匂いが染み込んでいる。摺衣の感触とこの匂いにつつまれるたび、山という自然環境を活かし、心身を解き放つしくみを生んだ知恵の深さを思う。

月山八合目に集まった修験者。雲間に鳥海山（提供・関守ゲイノー）

羽黒修験の峰入り行で籠る荒澤寺（提供・関守ゲイノー）

法螺貝。修験十六道具のひとつ

大先達（羽黒修験の長）と外国人修験者（提供・関守ゲイノー）

先達衆。役種に応じた色違いの装束をつける（提供・関守ゲイノー）